

## 【寄稿】 徳本正彦先生記念講話（2015年1月21日）

福留，久大  
九州大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/2230529>

---

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 2, pp.314-317, 2019-03-25. 奥田八二日記研究会(九州大学大学文  
書館内)

バージョン：

権利関係：

【寄稿】

徳本正彦先生記念講話（2015年1月21日）

徳本正彦 九州大学名誉教授 略歴

- 昭和 6（1931）年 1月26日 埼玉県浦和市にて生まれる  
昭和 18（1943）年 小倉市立西小倉小学校卒業  
昭和 23（1948）年 福岡県立小倉中学校卒業  
昭和 24（1949）年 第五高等学校文科1年終了、同年九州大学入学  
昭和 28（1953）年 九州大学法学部（政治専攻）卒業、同年同学部助手  
昭和 32（1957）年 九州大学教養部講師  
昭和 38（1963）年 九州大学教養部助教授  
昭和 48（1973）年 九州大学教養部教授  
昭和 59（1984）年 九州大学法学部教授  
平成 2（1990）年 法学博士  
平成 4（1992）年 九州大学退職、同大学名誉教授、同年姫路獨協大学教授  
平成 13（2001）年 姫路獨協大学退職、同大学名誉教授

徳本先生の葦水忌講話

2015年の葦水忌を迎えるにあたって、昨年まで無かった記念講話を企画することになった。協議の結果、奥田さんの長年にわたる友人で、重要な岐路に立つごとに奥田さんが相談相手にしてきた徳本正彦先生にお願いすることになった。九州大学の法学部助手、教養部の政治学担当の助教授・教授を経て法学部教授を務められ、九州大学名誉教授。しばらくは姫路獨協大学での教鞭を取られたが、今は福岡に帰って勉強会などに元気に参加しておられる。

快く講話を引き受けて下さり、「演題はどうしましょうか」と尋ねたのに対して、「お任せしますよ」とのことだった。私たち世話人が選んだ演題が、「今、奥田八二ありせば」。奥田さんが今生きていたら、何を思い、何を為すだろうか、そういうことを話して頂きたい、と思ったのである。

1月21日、読経と焼香の法要を終えたところで、徳本先生の講話に移った。以下に、その講話をできる限り忠実に再現してみたい。

「ええ、徳本でございます。九大の教養部の社会科学研究室で長い間ずーっと同僚でございました。それだけに限らず、公私ともに奥田さんとは色々と深いものがございました。本日は、奥田さんありせば、ということで話をするように言われているわけです。奥田さんと

はどういう方だったか、皆さんもちろん十分にご存知だとは思いますが、そのことに一寸だけ触れましてですね、その後、いま奥田さんが生きておられたら、ということで私の考え方がいいますか、私はこう考えるということを上申上げてみたいと思います」。

「私が、奥田さんと親しくなりましたのは、私が法学部助手、奥田さんが教養の助教授をされていた、今から 60 年前、1955 年のことです。しかも場所は大学の教職員組合の部屋でした。福岡県大学教職員組合協議会（福大協）と九州地区大学教職員組合連合（九教連）というのがありまして、奥田さんがその委員長、私が書記長を致しておりました。そこで親しくなりました。それから、1960 年の安保・三池闘争の時代を迎えるわけですが、それぞれの立場で活動していました。奥田さんは向坂先生の社会主義協会に所属しておられました。私は、向坂先生から「来ないか」と誘われましたが、辞退して、入っておりませんでした。そして、安保・三池の一連の事件が終わったあと、1962 年から 63 年にかけて、「一緒に勉強しようや」ということで、2 人だけの勉強会を致しました。そして、今日、ここに持ってきたのですが、『近代思想史』という本を出しました」。（奥田八二・徳本正彦『近代思想史』法律文化社、1964 年 5 月 10 日初版、1973 年 10 月 20 日改訂版——福留注記）。

「この本の中で、奥田さんが語っておられることを、一節だけ御紹介してみたい。『人間は、社会的動物である。だから、実践は、いかなる意味でも社会的実践である。また、実践するわれわれ自身、歴史的・社会的な＜いま＞によって限定された人間であるよりほかはない。だから、実践者としての自分を意識するということは、簡単に言えば、＜いま＞自分は何をなすべきか、何ができるか、ということをして社会に生きる自分として知ること、あるいは自己の置かれている客観的および主体的条件を社会的人間として知ることである』。こう書いておられます。この奥田さんの考えは、終生変わることは無かったと思います」。

「しかし、時代の変化の中で、奥田さんは苦渋の場に再三立たされます。特に大学紛争の時代、奥田さんは学生部長をしておられて、苦しい立場に立たされます。大学の革新系の教員たちは、大学自治論を楯にとって、占拠された状態に対して機動隊を導入することに、おおむね反対でした。そのなかで、奥田さんは決断を下します。機動隊を入れてでもこの紛争を解く以外に道は無いんだ、と。あの時の奥田さんは、非常に苦しかったと思います」。

「その後、知事選挙の問題でも、奥田さんは悩まれることになります。皆さん御存知だと思いますが、奥田さんは若い頃から、自治研究会の講師を務めてこられました。また地域政策懇話会を立ち上げて、地域政策、地方自治の問題に正面から取り組んで、リーダーとして活動されていました。ですから、知事候補に推されたときは、随分迷われたと思います。それでも、最終的には、やるしか無い、と決断を下されます。今日、奥田さんの当時の日記が公開されるようで、あるいはその辺の奥田さんの真意が伺えるかと思います。私が、いまでもありありと覚えているのは、<sup>だいまようまち</sup>大名町の木梨弁護士の事務所で、私と木梨さんと岩崎隆次郎さんと、そして奥田さんと 4 人で、知事選の話をして、最後は奥田さんが腹をくくられた時のことです。事務所を出て、奥田さんは自転車を引きながら、私はその横に立って歩き

ながら、大名町から警固<sup>けいこ</sup>の交差点まで行きました。そのとき、奥田さんはおっしゃいました。「腹を固めるしかないんだよなあ。オレは固めたよ」と、おっしゃいました」。

「その数日後、奥田さんは私の家を訪ねてくれました。私は、長住<sup>ながずみ</sup>に住んでいましたが、奥田さんは多分初めてだったのではないですかねえ、探してこられたのだと思います。家へ上がって貰って、話を伺いました。「いやあ、家内がやめろ、と言うんだよなあ。困っているんだよなあ。なんぼ言ってもウンと言ってくれない。なんとか、君、協力してくれんか」ということでした。それから、私は奥田さんのうちに伺って、幸夫人に会いました。どういう風に話を持っていったら幸夫人にうなずいて貰えるか、ずいぶん心配して、あれこれ考えて、かなり長い話になったのを覚えています」。

「それから、知事になられたわけですが、知事になられた後の奥田さんというのは、大変苦しかった、と思いますね。それまでの奥田さんは、行政に対して抗議をする、注文を付ける、という形でやってこられたわけですが、今度は自分が行政の担い手になる、しかも知事という重職、県議会は少数与党、ずいぶんいろいろ悩まれたと思います。苦しかったことでしょう。それを彼は乗り切られました。耐え抜きながら。革新系の人々は、革新知事が誕生したのだから、もっともっとやって欲しいと希望を持ったと思います。しかし、現実には県政の置かれた状態というものは、外から見ると単純なものではない。いろいろのいきさつがありました。そういうなかで、任期を三期にもわたって全うされました。奥田さんは、難しいものだと考えられたと思います」。

「その奥田さんが、いま、おられたら、どういう風にされるだろうか、ということで一寸申し上げますが、知事を経験された後の奥田さんと、知事になられる前の奥田さんでは、その考え方に若干違うものがありますが、しかし、その根底を貫くものは一貫していると思います。一言で言えば、庶民的精神と申しますか、庶民的精神に立って正しいと思う道を進む、そういうことではなかったかと思います。昨年来の様子、特に12月の総選挙の様子を見て、奥田さんは慨嘆されたと思います。憮然たる思いで慨嘆されたと思います。日本人は、一体、何を考えているのだろうか、有権者の半分近くは選挙に参加しませんでした。そして、かつての輝かしい社会党の姿はありません。土井たか子さんが委員長時代の時代の社会党はどこに行ったか？ 一部は社民党に、一部は民主党に移った。しかし、社民党の凋落ぶりはどうか、民主党はガタガタだ、共産党がしっかりしているのに比べて、なんということだろう。そういう思いをひとしお強く持たれたことでしょう」。

「続いて、奥田さん、日本の現状に対して、怒っておられると思う。とりわけ安倍政権のあり方に対して非常に怒りを持っておられると思う。戦時中、奥田さんは陸軍で宮崎におられました。米軍の上陸に備えて陣地を構築しておられました。そういう奥田さんが、あるとき、戦争を振り返って、『なんという馬鹿なことをやったものか』と述懐されたことがあります。安倍政権が特定秘密保護法を強引に通過させ、集団的自衛権をついに実現させようとしている、そういうやり方に対して、一貫して平和憲法擁護の精神を持ってこられた奥田さ

んは、本当に怒りを持っておられると思う。先般の総選挙におきまして、沖縄ではすべての選挙区で、辺野古基地建設反対の意思表示がはっきりと示されました。それに対して、政府は何と言ったか。従来通り基地建設の作業を粛々と進める、と言った。基地建設反対で当選した沖縄県知事が就任挨拶に行っても、安倍政権は会おうともしない。そして、沖縄県への補助金を減額する、何という卑劣な次元の低い対応かということで、奥田さんは、非常に怒っておられる」。

「2番目に、奥田さんは、政府のエネルギー政策についても怒っておられる。フクシマ原発の事故の原因はどこにあるか、事故の責任はどうか。そういう究明がほとんど行われないうままに、まるで既定路線であるかのように原発再稼働の地ならしが進められる、札束をヒラヒラさせながら。そういう原発推進のエネルギー政策に対しても怒っておられる」。

「そして、3つめが、アベノミックス。いろいろの粉飾がある。いろいろの材料を見せているように思われる。しかし、全体として、明らかに大企業を中心とした富裕層に厚く、日々の生活に苦しんでいる社会的弱者に対して薄い政策ではありませんか。所得格差はますます拡大させて行くばかり。そういうアベノミックスのあり方に対して怒っておられる」。

「しかし、怒りに走り、怒るばかりではダメだ、とわかっておられる。じゃ、どうするんだ、ということですが、奥田さんは実践という問題に自ら進んで立たれると思う。しかし、その実践は、奥田さんにとっては、かなり条件の悪いものです。社会主義協会もかつての強さはないのではないのでしょうか。活動拠点としての社会問題研究所はどうなっていますか。そういうなかで、発信を続けるためには、インターネットの活用しか無いのじゃないか、ということで、インターネットの操作を学んで行かれるのではないか、パソコンを通じて発信を続けて行かれる、と思います」。

「続いて、新しい時代的条件のなかで、様々の市民運動を集めてゆく、政党政派を含めた新しい形のネットワークを作ってゆかなければならないのではないかと。そういうことを考えられると思います。そういう過程で得られた認識を、あるいはペイパーにする、あるいはインターネット発信を行う、そういう形で、先に申し上げたような怒りを理性的なメッセージに代えて、実践を続けられるのではないのでしょうか。そして、さらには、われわれを越えて、われわれの子や孫の世代に向けて、『しっかりせい！』と叱咤激励されるのではなからうか、私は、そういう風に思います。」 「私も後数日で84歳になります。しかし、命ある限り、奥田さんに習って、われわれの次の世代、次の次の世代に対して、私どもの義務を、メッセージとして送り続けてゆかねばならないのではないかと、そういうことを申し上げて、私の話を終わらせて頂きます」。

奥田八二先生の世代、徳本正彦先生の世代、それに続く私たちの世代が、「<いま>自分は何をなすべきか、何ができるか」を深く考えさせられた記念講話であった。

(2015年2月22日筆記、2019年1月2日添削、福留 久大)